

Aiyugo

アイユウゴー通信 (特集) 第19号

～国際協力活動に必要な英語力をつける～

2013年3月 ベトナムスタディーツアー報告
参加者：近畿大学 総合社会学部 2年生7名



カッチェン役場でのあいさつを終えて

毛利 友紀

1週間のベトナムの旅で、住む環境が違えば幸せの内容も違うということを学んだ。一般的に「豊か」だと言われている先進国の日本に住む私たちにとっての幸せはお金と強く結びついている。「豊かさ」をお金で測りたがり、ある地域の平均所得の数値が著しく小さければ、緊急の問題のように思う。私もその一人だった。

しかし、実際にCAT TIEN村を訪れて考えは変わった。確かに日本の「豊かさ」はなかった。しかし、農業を営み、畑の野菜や家畜を食べながらマイペースに生活している彼らにとって、近所の人々と談笑したり、遊んだりする時間がかけがえのないもののように見られた。



さとうきびを食べる子どもたち

彼らの幸せは人の絆の多さや密度なのだろう。お金が絆か、どちらが良いという訳ではない。幸せの内容や価値観には多

様性があっても優越はなく、共存できればいいと思う。困っている人を助けたいと思ったとき、それは自分の価値観の押しつけではないか、と自分に問うてみるのが援助者にとって大事だと考えさせられた。

西谷 彩

私たちが訪問した学校は、主に強制移住させられた少数民族の子どもたちのためにアイユウゴーが建てたと聞いた。

しかし、ランチ代が払えないために、学校のすぐ側に住んでいるのに、通うことができない少数民族の子どももいるそうだ。まだ、あの一帯では、子どもの教育環境に問題があると感じた。

農業の面では、米よりも効率良く収穫でき、高く売れる薬草の試験栽培をしていた。お金を稼ぐという点ではすごくいいアイデアだと思った。ただ、乾季は作物を栽培することをあきらめるというのは、効率が悪いと感じた。乾季も灌漑をするなど、作物が栽培できるようにする方法はあるはずだし、広い土地が荒れ放題になったままなのは、少しもったいないような気がした。人々の意識改革も必要だと感じた。

野中 祐貴子

今回の研修では、アイユウゴーが建てた学校を訪問した。彼らにとって多分初めてである私たち日本人の訪問にも、元気で笑顔で迎えてくれたときはとても嬉しかった。子どもたちの元気さを見て、満足しながら毎日楽しく通えているのであろうと感じた。

しかし、教室が狭く、先生の数も少ないと感じた。先生の数を増やしたり、机や椅子、そして遊ぶ道具などといった面でも継続的な支援がとても大切なのだということを強く感じた。



永井 拓至

「今、ベトナムに必要なものとは何なのか」。今回のベトナム旅行で考えさせられたことである。ベトナムは日本と比べれば貧しい国である。しかし、私たちの訪ねた村の一つには浄水システムが設置されていた。また、食べるものがなくて苦しんでいる人を見かけることもなかった。人は食べるものがあれば生きていける。あとは何が必要なのだろうか。

私は裕福になるための知識が必要であると感じる。実際に会った少数民族の人は「お金がないので、自分の子供を学校に行かせることができない」と言っていた。ベトナムでは教育制度がまだまだ整っていない。教員の雇用体制、教育費の

改善などを行っていかねばならないと感じた。そのためにはNGOもただ学校を建てるだけでなく、中長期的な学校運営計画を考えるべきである。私は日本の教育制度に感謝したい。

小川 美波

私は、今回の研修で初めて海外、NGOの現場に行きました。この研修で、現地の人たちが主体となり、考えなければ貧困は解決できないと思った。

カチェンで行った村の現状からただ建物を建てるだけでは何の解決にもならないと思いました。現地の人々のニーズに合わせて制度を整えること、それだけでなく、現地の人々がどうしたらより良くなるのだろう。と自発的に考える環境をつくり、彼ら自身が問題を解決していくことが、今後の発展に繋がるのではないかと思います。

NGOなどは決して主役ではなく、その国、村に住む人々が何年・何十年とかけて生活をより良くしていく、きっかけや手助けをする存在であるべきだと思います。

山田 萌

今まで私は、NGOの活動は貧しい地域や村に学校や井戸、橋などを建設することで、建物さえできたら後はうまくいくものだと思っていた。

旅の途中で、“橋をつくるときは、先進国にしかつくれないようなものではなく、周辺に住む人々でも作れて、近くで入手できる材料を使う”という話をきいた。故障したときに自分たちで直せなかったら使い物にならなくなってしまうからだ。今回の旅で、モノをつくるだけでなく、それをうまく活用していくための技術やシステムを伝えるということと、地域のことを理解し、現地の人々の意見を聞くことの大切さを学んだ。



宮嶋 涼

私は、今回のベトナム研修で多くのベトナムの人たちと交流することができ、その中で大きく分けて2つの素晴らしいことを学ぶことができた。

1つめは、英語の大切さというものが、とても身に染み込んでいることだ。私たちが他の人たちと繋がるための大部分と

なっていたものは、やはり世界の共通語である英語だった。生きた英語を聞いたり、話したりしなければならぬ環境では自分の能力がまだまだ足りないということを改めて実感させられた。

もう1つは言葉はあまり通じなくともフットボールで他国の人と繋がれたということが、とてもいい経験となった。今回の研修がきっかけとなってもっと多くの世界の人たちと英語でも、フットボールでも繋がりたいという目標も見つけることができた。



新田香織

(アイユゴー理事・近畿大学総合社会学部教授)

3月5日から13日までの9日間、近畿大学総合社会学部2年生7名と共にベトナムにおけるアイユゴーの活動拠点を訪問した。目的は「日本の小さなNGOが、海外のどのような現場でどのような人たちと、どのような活動をしているのかを自分の目で見て考えること」であった。各々の感想文にあるように、1人1人が色々な想いを体験し、「貧しさとは」「豊かさとは」「支援とは」など、様々な疑問を感じたようである。もちろん学生たちは、学校を建てるまでの経緯、現地の役人たち



が昼食や夕食に全員を招待してくれるまでの信頼関係を築いた経緯、さらに乾期に作物栽培をあきらめているかのように見える背景などについては詳しくは知らない。しか

し、これをきっかけとして、「現地の人々と対等な立場で、その



地区の人々が少しでも暮らしやすくなるように、共に働く」
意味を考え、今後何らかの行動に結びつけてくれることを期
待したい。最後に献身的な協力をしてくださった Quan 氏始
め、すべての方々に深謝します。

(左から Minh さんと Quan 氏)